

2023年度 入試問題

一 次

国 語

注意

- この冊子は22ページまであります。
- 問題は□から□までです。
- 解答用紙は冊子の中ほどにはさみこまれています。
- 時間は50分です。
- 解答はすべて解答用紙にていねいに書いてください。
- 記述は解答欄内に収めてください。一行の欄に二行以上書いた場合は、無効とします。
- 解答用紙のみ回収します。

渋谷教育学園
幕張中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

これはマッチもまだあまりないころのアメリカの話で、ちょうど「悪魔印」のマッチというのが出はじめたころなのだが、それは簡単にこどもの手に入る品物ではなかった。

だからこそ、こどもが深夜に墓地にゆくなどというのは大へんな冒険で、ピクニックに洞窟^{どうくつ}に入って迷ってしまうと、こどもの力では、もどつてくるのが大仕事で、三日三晩も、少年少女が二人きりで洞窟にとじこめられてしまうことになった。

品物がない時代には、大人だけでなく、こどももものをつくりださなくてはならず、相当な時間をそれにさくことになる。したがって、学校に行く時間をそれほどとらなくてもよいということになり、こどもたちには、ひまがたくさんあった。

今の日本には、品物が出まわっており、こどももひまがないのだから、この小説の時代とはがらりとちがっていて、つながりがほとんどない。この小説に入りこむことはむずかしいだろう。

私は、小学生のころ、『少年倶楽部^(キョウクラブ)』などにのっている佐々木邦^(ササキ)の小説が好きで次々に読み、佐々木邦が訳しているので、マーク・トウェーン作の『トム・ソーヤの冒険』と『ハックルベリー・フィンの冒険』とを読んだ。『ハックルベリー』のほうが名作だと言っているのをきいており、その後そだつにつれて私の記憶の中では、『ハックルベリー・フィンの冒険』のほうだんだんに『トム・ソーヤ』よりも大きくなったが、それでも、小学生の私にとっては『トム・ソーヤ』のほうがおもしろかったし、ここから入っていつ『ハックルベリー』にゆきついた。

なぜこの本にひきよせられたかというと、私が学校が好きでなかったからで、学校にも家庭にもおちついていられなかったことには、今でも『トム・ソーヤ』は魅力があるだろう。

道であった二人の少年の^(a)シヨウダン。

「それ、なんだい？」(トム・ソーヤ)

「なあに、ダニさ」(ハックルベリー)

「どこで手にいれた？」

「森の中」

「それ、なんとだったら、とつかえる？」

「わからねえ、売るつもりはないんだ」

「ああ、いいさ。なにしろちっちゃなダニだよな」

「ほう、ひとのダニに【X】をつけるんなら、だれだってできらあ。おれは、こいつで満足さ。おれにとっちゃ、じゅうぶんけっこうなダニなんだ」

「ちえっ、ダニなんか、いくらでもいらあ。その気になれば、千匹だってとれるさ」

「ほう、じゃ、なぜとらない？ それはな、とれっこないのが、すぐよくわかってるからさ。こいつは、どうやら、はしりのダニなんだぜ。おれは、今年、はじめて見たやつさ」

「なら、ハック、……そいつのかわりに、ぼくの歯をやるよ」

「見せてみな」

トムは紙きれを取りだして、用心しながらそれをひろげた。ハックルベリーは、ほしそうな目でながめた。^(b)ユウワクはたいそう強かった。ついに、彼はいった。

「これ、本物か？」

トムは唇をあげて、抜けあとを見せた。

「そうか、よし」ハックルベリーはいった。

「取引しよう」

(大塚勇三訳、福音館書店発行)

そこで二人はわかれたが、それぞれがまえより物もちになつたような気がしていた。それぞれの少年が、自分のねぶみに自信をもっているからで、自分で価値をつくっているからだろう。あかんぼうの世界にはそういう側面がある。その方法が、幼年時代、少年時代にもちこされ得る。ところがそこに学校がわりこんでくる。学校の先生は、一つの価値尺度があると信じており、それを親たちも、それぞれの家庭で信じている。そこで、こどもが、ダニではなく、カブトムシぐらいをもっているとしても、

「それ、いくら？」

というところから、おたがいの話がはじまる。その取引は、デパートとおなじ ^(c) コウテイ相場によることになり、日本全国一律ということになる。この価値のエスカレーターにのつて、男女とも定年に達し、墓場までゆくことになる。定年から墓場までに普通にゆるされている老夫婦の家庭内の会話も、デパートのねだん表どおりということになる。そこには、^① 小泉八雲とはまた別種の怪談じみたものがある。はしないか。

②『トム・ソーヤー』には、これとはちがう世界がある。

男女共学は日本でひろくおこなわれているが、成果をあまりあげていないようだ。この小説の中のトム・ソーヤーとベッキー・サッチャーは、たがいに学校でも道でも家の前でもハチのダンスやクジャクの羽ひろげまがいの見せびらかしをさかんにして、それをやりすぎたため、ピクニックに行った洞穴ほらあなの中で一行からはぐれて、三日三晩をすごす。それでも、救いだされた時には、セント・ピーターズバーグ村をあげての大歓迎だ。

洞穴の中で、トム・ソーヤーは、殺人犯のかくした宝を見つけて、追跡してきた仲間のハックルベリー・フィンと山わけして、ともに自立の道を見つけるのだが、両者の交友が、そのまま墓場までつづいたわけではない。おなじセント・ピーターズバーグ

③ ほうが その萌芽はすでに、この第一作にある。

宝を山わけして金持ちになつた浮浪児ハックルベリーは、ある未亡人の家にひきとられるが、そこでナイフとフォークを使つて食べるのや、学校に行くのにたえられない。彼は家を出て、道端のタルの中でくらす。トム・ソーヤーが、さがしにやつてきて、

「でも、みんな、そうやってるんだぜ、ハック」

「トム、それだって、おんなじこったよ。おれはみんなじゃねえから、がまんできねえんだ。あんなにしばらくられるなんて、やなことだよ。それに食いのものが、わけなく手にはいりすぎる」

この本は、今の日本のこどもにとって参考になるものではなさそうだ。ここにいるこどもたちには、ひまがある。ひまの中で、学校は自然に小さいものになる。こどもはこどもそれぞれの世界をもち、そこから自信をもつておとな（親と先生）をねぶみすることができると。甘えておとなにぶらさがりながら（ということは親と先生の価値基準をうけいれて）の批判ではないのだ。^④ そのひまを、今のこどもは、どのようにしてつくることができるか？ こどもだけではなく、親は、どのようにひまをつくることができるか。

注

（鶴見俊輔）「おとなをねぶみするひま マーク・トウェーン 『トム・ソーヤー』の冒険」全文

*1 『少年倶楽部』……少年のための月刊総合雑誌。大正三年創刊。

＊2 佐々木邦……静岡県出身の小説家。

問一 ―― 部(a) (c) のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ―― 【X】に入るひらがな二字の言葉を答えなさい。

問三 ―― 部①「小泉八雲とはまた別種の怪談じみたもの」とはどういうものだと考えられるか。その解釈として最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 非現実的なものが現実にあられ人間を苦しめるという怪談の恐怖とは異質な、現実の中に非現実的なものが侵入しているにも関わらず、それが非現実だと理解されていないという底知れぬ不気味さ。

イ 苦しみが長時間続くわけでもなく、やがては終わりへと向かうという怪談における恐怖とは異質な、人間をその人生の途中から終わりまで、長期に渡って苦しめ続けるという、救いの訪れない絶望的な恐怖。

ウ 日常目にせぬものが日常に現れ人間を苦しめるという怪談の分かりやすい不気味さとは異質な、日常に既にあつて実は個々の人間の生の歩みを損なっているのに、当の人間は損なわれていることに自覚的ではないという不気味さ。

エ 人間の世界を超越した霊的な存在が人間世界に現れて人間を苦しめるという怪談の持つ恐ろしさとは異質な、およそ超越的とは言えないものが人間の健全な精神を破壊し、苦しみの感情から逃れられないようにするという不気味さ。

オ 物質的な性質を帯びて人間の身体性を破壊するものが現れるという怪談の怖さとは異質な、一切の物質性を持たない純粋な理念が、人間の均質的な精神のありかたを破壊してしまうという、得体の知れない恐怖。

問四 ―― 部②『トム・ソーヤー』には、これとはちがう世界がある」とあるが、本文において筆者は他の世界との比較を通じて『トム・ソーヤー』の世界の特徴を説明している。その特徴とは何か。―― 部②よりも前の内容をふまえて説明しなさい。

ただし、比較されている他の世界の特徴については説明しないでよい。

問五 ―― 部③「その萌芽」とあるが、物語における二人の少年のどのような様子に「別れ」の「萌芽」が見いだせるといえるのか。簡潔に説明しなさい。

問六 — 部④「そのひまを、今のこどもは、どのようにしてつくることができるか？ こどもだけではなく、親は、どのようにひまをつくることができるか」とあるが、この部分とも関連した、本文全体の内容についての解釈として適当なものを次の中から二つ選びなさい。

ア 品物がない時代におけるこどもたちは、ものをつくることに、大人たち同様時間がとられるため、かえって「ひま」という、人間にとって非常に大切なものを持ちえたが、現代社会では、それが困難になっていると筆者は考えている。
イ「ひま」の中で、こどもたちがそれぞれの世界を持つとうとして冒険へと乗り出すことに対して、社会常識にしばられた大人たちが寛容になる場面がないという点では、現代社会も『トム・ソーヤー』の世界と同じだと筆者は考えている。
ウ「ひま」の中を生きていることができた時代のこどもたちは、おとなたちと関わることなく、こどもだけの閉じた世界の中で生きていったが、今日の社会においては、そのような閉じた世界の中で生きることが難しいと筆者は考えている。
エ「ひま」を持たないために子供たちが、外での活動を縮小せざるをえない現代において、学校の重要度は高まっており、社会的責任も重くなっていると筆者は考えており、そうである以上、人々は学校の方針に従うべきだと主張している。
オ 筆者は親が「ひま」を持たず、それゆえに社会常識が支配する世界を外から見ると余裕がないことをも問題視しており、親が「ひま」を確保し、自らの世界を「ねぶみ」することが大事だと考えつつも、それは難しいとみている。

問七 本文中で言及されている「マーク・トウェーン」および「シクロフスキー」と同じ国の作家が書いた作品をそれぞれ選びなさい。

- ア 『星の王子さま』
- イ 『イワンのばか』
- ウ 『ハムレット』
- エ 『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』
- オ 『不思議の国のアリス』
- カ 『若草物語』

二

次の文章は津島佑子「鳥の涙」の、中盤と最終盤を部分的に省略したものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

——おまえのお父さんはまだ帰らない。……

こんな言葉から、私の母の「お話」ははじまった。私と弟は二つ並んだふとんに寝ている。私が七歳のころ、とすると弟は四歳だったことになる。① **とても可愛いお話だった**ので、私と弟は眼をつむり手をつないで聞いていた。眠る前の子どもに聞かせるにはあまりにこわいお話だと母もやがて気がついたのか、いつの間にか、私たちは別のお話しか聞かなくなっていた。

——これは子守り歌だったというんだけど、どんな歌だったのか、わたしにはさっぱりわからない。あんなたちのおばあさんにも、もう、わからなくなっていた。子守り歌だったから、自分の赤ちゃんに聞かせるお話なの。

お話を始める前に、母はこのようなことを言ったような気がするのだが、これもはっきりしない。あとから私がこのお話のことも知って、それで自分の記憶をすりかえてしまっているようにも思える。弟に念のために聞ければいいのだけれど、弟はずっと前に死んでいる。

——おまえのお父さんはまだ帰らない。……

母は話しはじめる。

——……毎日、私はおまえを泣きながら育てています。おまえのお父さんはとなりの国の人たちに連れられて行きました。そこに行けば必ず死んでしまうと言われる、おそろしいところ。冷たい海には、たくさんのお父さんたちがいます。そのさかなを一日中、おまえのお父さんは集めつづける。海の波。お父さんは転ぶ。となりの国の人たちがお父さんを棒で打つ。体から血が流れる。足も手も海の冷たさでぼろぼろになって、血だらけになっている。お父さんは食べるものももらえない。寝る時間ももらえない。お父さんは病気になる。となりの国の人たちは病気になるお父さんを棒で打つ。病気のお父さんは体中に血を流しながら、冷たい海のなかに戻って行く。海のなかには、人間の血のにおいが大好きなサメもいる。そんなおそろしいところ。

おまえのお父さんは行きたくなかったのに、命令に従わないと殺されてしまうので、ある日、船に乗って、となりの国の人たちの村へ出かけて行きました。そのとき、おまえのお父さんはおまえを抱いて泣いている私に言いました。

「もし私がずっと帰って来なかったら、気持ちのいい軽い風が海から吹いてこないか、気をつけるんだよ。そうしたらおまえは海辺に出て、遠い沖を見つめるんだ。すると鳥の群れが陸に向かってくるのが見えてくる。いいね、その先頭に首のない鳥が一羽飛んでいる。それが私なんだ。ちゃんとその私を見つけて、拜んでくれるね。」

それにしても父親のいない私たちに、母はなにも思わずにこの「お話」を聞かせていたのだだろうか。私たちの父は弟が赤ん坊のころに母のもとを去って、母よりもっと若い女と暮らし、そうして、当時、東欧と呼ばれていた国のひとつに行って、それから、^(a) **ショウソク**がわからなくなった。父と母は結婚していなかったのだ、私たちはもともと、法律上、父のいない子どもたちだった。父は私が生まれたころ、まだ学生だったという。私が大学に入ったとき、母が父との生活のありのままを、でも最低限の範囲で教えてくれた。それから十年以上経っているけれど、私は父について母になにも聞かないし、母も言わない。三歳までの父親が父と言えるのかどうかさえ、私にはわからない。少なくとも、私はその存在を、自分がこの世に生まれてくるきっかけとしか感じなくなっている。② **父という言葉とは無縁の、ただのきつかけだ**。まして、母は私が大学を卒業してからある年上の男と生活をともにしはじめ、今でも老夫婦として一緒にいるので、私にも母たちに対して家族らしい思いが育ち、父という言葉を聞くと、今の母の相手を自分から思い浮かべるようにさえなっている。と言って、お父さんと呼んだこともないし、遠慮のない口ゲンカをしたこともないのだけれど。

なにしろ自分でさえ首をかしげたくなることがあるほど、私は自分の父についてなにも特別な思いを持たずに、この年まで過ごしてきた。結婚して、子どもを持っても、その無関心は変わらなかった。子どものころ、父がいなくて心細いとか、物足りない、と感じたおぼえがない。でも、母はどうだったのだろう。このごろになって、そんなことが気になりだしている。私と弟を寝かし

つけるときに、あの「お話」を聞かせてくれた母は父と別れてからまだ、四年しか経っていなかったのだし、たったの三十歳だったのだ。母こそ心細い思いで、「お話」の私と自分を重ね合わせ、でも自分の相手はだれかに強制されて離れていったのではなく、殺されて首のない鳥になったのでもない、と溜息をついていたのではなかっただろうか。それとも、当時の母は生活費をだれにも頼れなかったから、私たちの世話をしながら働くのに忙しすぎて、なんの感傷もなく、自分も一日の疲れで半分眠りながら、子どもたちのために「お話」を寝言のように語っていただけだったのか。

(中略)

最近になって、私は母から聞いたこの話がどこから来たのか気になりだし、あれこれと民話の本をのぞきはじめた。中学生になった私の子どもに、あの「首なし鳥」の話さ、あれ、だれに聞いても、知らないっていうよ、なんで、あんな話を知ってたんだよ、とあるとき、言われて、本当になぜなんだろう、とうろたえてしまった。老いた母にも、なにげなく聞いてみた。母はいとも簡単に答えただけだった。

私のお母さんが話してくれたから、私もあなたに話してやっただけですよ。

私の祖母は青森から東京に出てきた人だった。祖父は埼玉に生まれ、東京の学校を卒業して以来、東京の会社で働き、私の母がまだ赤ん坊のころに、事故で死んでしまった。それだけのことを思い出し、私はまず青森に伝わる民話の本を買ってきた。私の探す「鳥の話」は見つからなかった。つづけて、埼玉の民話集を買求めた。やはり、「鳥の話」は見当たらない。岩手、秋田の民話も同じように調べてみた。どこにも、「鳥の話」に似通った話すら見つけることができなかった。

祖母が自分で作りあげた「お話」だったのだろうか、とも考えてみた。それとも、祖母の近くにいただれかが創作したのか。でも、私にはどうしても、そのようには思えなかった。だれかの思いつきで作られたにしては、あまりに風変わりな「お話」ではな

いか。なぜ、「ある男が」と言わずに、わざわざ「おまえのお父さんは」と言わなければならないと決められているのだろう。なぜ、首を失った海鳥が悠々と空を飛びつづける姿を想像できたのだろう。ふつうに考えれば、こんな残酷な姿はないのに、どうして「お話」のなかでは、それが美しい姿にさえ感じられてしまうのだろう。

祖母の生まれた青森のすぐ北には、北海道という、島とは呼べないほどに大きな島が存在していることに、私はふと気がつかされた。祖母の家は太平洋に面した古い漁村の**アミモト**だったという。それならば、北海道の海辺になんらかのつながりがあったのではないか。北海道は、アイヌの人たちの土地だった。

もしかしたら、という思いで、私はアイヌの民話集を図書館で探して、眼を通してみた。アイヌの歌を集めた本も調べてみた。そして、私はとうとう、あのなつかしい「お話」とそっくりな話と巡り合うことができたのだった。

(中略)

祖母のこの「お話」を聞いて育った私は、夫を失ってはいないから、「おまえのお父さん」と自分で語ってみても、自分の夫のことなど思い浮かべはしない。私の父や祖父を思ってみるわけでもない。この「お話」をかつて、^③寝床で聞きながら手をつないでいた幼い弟が、私の頭のなかで、首なし鳥の姿になって羽ばたきつづけている。

^④子どもが生まれたときに、私は夫の顔を見て泣いた。夫がそのとき考えたような、うれし涙などではなかった。

——この子も死ぬ、きっと死んじゃう。そう決まっているの。弟も九歳で死んだ。おじいさんも三十三歳で死んだ。父は姿をけした。男はみんな、私のまわりからいなくなる。だから、あなただって死ぬかもしれない。でも、あなたはもうおとなだから、いつか、あきらめがつく。せつかく生まれたこの子が死ぬのは、どうしたってあきらめられない。どうしよう。この子が弟のように死ぬのを待ちながら育てるなんて、そんなこと、できない。どうして男の子なんか生まれてきたの。男の子なんか欲しくなかった

のに。

長い間忘れていた、弟と遊んだときの喜びが大きな波になって、産後の私に押し寄せてきたのだった。父のいない家で、忙しい母の代りに私は弟のオムツを取り替えてやっていたし、御飯も食べさせ、洋服も着せてやった。お風呂に入ったあと、真裸で弟とふとんの上を転がりまわるのが、大好きだった。弟が小学生になってからは、一年生の教室を必ず、私が毎日、見まわりに行った。弟に友だちができると、私も一緒に遊んだ。私の弟！ 私の弟！ 私がいつも言いつづけるので、私のクラスの全員が弟をよく知るようになった。おまえの弟！ あんたの弟！ クラスのみんなが、そう言って、私をからかう。それでも私は弟のそばから離れなかった。運動の苦手な弟のために、家で体操のコーチになってやったこともある。学年の代表に弟が選ばれて、終業式に生徒全員の前で、転任になった先生のための「送る言葉」を弟が読んだとき、私は心配のあまり、気分が悪くなってしまった。私の弟。私だけの弟なのだった！

この子は死なないよ、死ぬはずがないんだよ。私の夫は辛棒強く、まるでちょうど子守り歌をうたうように、私に言い聞かせつづけた。私は信じなかった。弟だって、死ぬはずがなかったのだ。でも三年経って、私の泣く回数は減りはじめた。六年経って、たまにしか泣かなくなった。⑤泣く代りに、私は母から聞いた「お話」をそのころから、私の子どもに聞かせはじめた。九歳になるうとする私の子どものために聞かせておきたかった。

——おまえのお父さんはまだ帰らない。……

すると、子どもは変な顔をしてつぶやく。

——ぼくのお父さん、いつつも帰ってくるよ。

私は無視して、「お話」をつづける。

——……毎日、私はおまえを泣きながら育てています。おまえのお父さんはとなりの国の人たちに連れられて行きました。……
——それ、だれの話？ おまえって、ぼくのことじゃないね。

私はなにを言われても知らんふりをしている。

——……でも、おまえのお父さんが言い残していった通りに、今、気持のいい軽い風が海から吹いてきた。なんてさわやかない風なんでしょう。私は急いで、海辺に走って行きます。沖のほうから、鳥の群れが飛んできます。私は息もできなくなり、鳥の群れを見つめます。ようやく先頭の鳥が見えてきた。私は心臓も止めて、先頭の鳥を見つめつづけます。白い羽根が大きくはばたいている。だけど、白い胴からまっすぐ伸びているはずの頭がない。……

……首のない鳥になってしまった私の弟！ 私の弟がようやく、私のもとに戻ってきてくれた。翼の羽ばたく音が、私の耳にひびいてくる。首のない鳥は私の頭上をまわりはじめる。真白な翼がまぶしい。翼の風が、私のまわりに渦巻く。まだ、死ぬはずじやなかったのに死んでしまったので、首のない鳥の神さまになった私の弟！ ねえ、聞いて、お姉ちゃん、聞いて、いつも私から離れずにしゃべりつづけていたから、今でも私に言いたいことが多すぎて、だからいっそ、首を捨ててしまった私の弟！ 首のない鳥の翼から大粒の涙が光りながらしたり落ちてくる。その涙で、私の頭、肩、胸、手が濡れていく。翼の風が、私の体を凍らせる。羽音が耳にひびく。弟の声が羽音とともに聞こえてくる。

お姉ちゃん！ お姉ちゃん！

私も叫ぶ。

私はここだよ！

そのとたん、首のない鳥の神さまになった私の弟は空高く舞い上がり、沖のほうにまっすぐ飛び去っていく。弟の涙に濡れたまま、私は砂浜で泣きつづける。……

そうして、私の子どもは九歳になった。弟のように死ななかった。私の子どもは十歳を過ぎても十二歳になっても死ななかった。そして、首のない鳥になった私の弟は沖のほうに飛び去って行った。

でも、ときどきあの翼の音が今でも私の耳を打つ。すると、私の体は翼からしたり落ちる弟の涙でびしょ濡れになる。翼の風

で凍りつく。

お姉ちゃん！ お姉ちゃん！

弟の声が聞こえてくる。弟の声は変わらない。首のない鳥の神さまになった弟の幼い呼び声がなつかしくて、私は微笑を浮かべ、耳を傾ける。

弟はもう戻ってこないのかもしれない。でも、私にはまだわからない。私の子どもがこの先いつ死ぬのか、夫が、私自身が、いつ死ぬのか、だれにもわからないように。

《注》

* アイヌ……現在、主として北海道に居住する少数民族。

問一 〓部(a)・(b)のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〓部①「とてもこわいお話だった」とあるが、どのようなところが「こわい」のか。説明として適当でないものを二つ選
びなさい。

ア 「お父さん」が強制的に連れて行かれ、暴力で脅おどされて無理やり奴隷として魚を捕らされた挙げ句、殺されて首のない鳥
になってしまうところ。

イ 自分の住んでいる国のとなりに、自分たちを突然拉致らちするうえに、そこに行けば必ず死んでしまうというおそろしい国が
あると知らされたところ。

ウ 若くして夫を亡くした「お話」の中の母の、ときが経たつても癒いえることなく、毎日悲嘆に暮れて泣きながら子供を育てる
悲しみが強く伝わってくるところ。

エ 「となりの国の人たち」が、父親に食事の間も寝る間も許さず、海の冷たさで手足から出血しても、倒れ、病気になって
も棒で殴って働かせるところ。

オ 棒で殴られて体中から血を流した「お父さん」が、人間の血のにおいが大好きなサメのいる海の中に入れられて、サメに
食べられて死んでしまうところ。

問三——部②「父という言葉とは無縁の、ただのきつかけだ」とあるが、どういうことか。説明として最も適当なものを選びなさい。

ア「父」は、法律上の父ではないために、家族の一員として感じる事ができず、他人としてしか意識できないが、確かに自分がこの世に生まれてくるのに必要な存在だということ。

イ「父」は、自分たちを裏切って別の女を作って家を出てしまい、「私」はそれを恨んでいるために、自分が生まれるのに必要だっただけの存在で父親とは認められないということ。

ウ「父」は、「私」が生まれたときにはもういなかった人であり、その不在を物足りなく思ったこともない生物学上「私」となる受精卵を誕生させただけの無関係な存在だということ。

エ「父」は、物心のつかないうちにいなくなっており、親子らしい交流の記憶は特になく、自分がこの世に生まれるのに必要だっただけの愛憎の感情すら湧かない存在だということ。

オ「父」は、「私」の弟が生まれて間もなく母のもとから去った、お父さんと呼んだことも口ゲンカをしたこともない関心の持てない存在であり、父親とは認められないということ。

問四——部③「寝床で聞きながら手をつないでいた幼い弟が、私の頭のなかで、首なし鳥の姿になって羽ばたきつづけている」とあるが、どういうことか。「私の頭のなか」で想像されていることを、なぜ、それを想像することになったのかという理由も含めて具体的に説明しなさい。

問五——部④「子どもが生まれたときに、私は夫の顔を見て泣いた」とあるが、このときの「私」はどういう心情になっているのか。説明しなさい。

問六 ―― 部⑤「泣く代りに、私は母から聞いた「お話」をそのころから、私の子どもに聞かせはじめた。九歳になろうとする私の子どものために聞かせておきたかった」とあるが、このときの「私」の心情の解釈として適当なものを二つ、選びなさい。

ア これまでの「私」は息子の誕生を素直に喜べなかったが、順調に成長した息子が、いずれ直面する死に向き合えるように、祖母から母へ、母から自分へと代々語り継がれてきた「鳥の話」を、途絶えさせずに受け継がせたいと思っている。

イ これまでの「私」は不気味な「鳥の話」を素直に受け容れられなかったが、話の由来がはっきりしたこととで幼い頃の家族の思い出と結びついて愛着が芽生え、話の内容が理解できる年頃までに成長した息子にも語って聞かせたいと思っている。

ウ これまでの「私」は夫に裏切られて別れた母が、夫が強制連行されて殺される話を、子供に語る意味がわからなかったが、子供が生まれて自分も母になったことから理解できるようになり、母と同じように子供に語って聞かせたいと思っている。

エ これまでの「私」は弟の死を十分に受容できなかったが、息子の順調な成長によって徐々に受け容れられるようになり、「鳥の話」を息子に語り継ぐことで、理不尽な死を迎えた弟の存在を、息子とともに感じつつづけていたいと思っている。

オ これまでの「私」は祖母や母とは違って夫を失ってはいないために、「鳥の話」を語る気にもならなかったが、夫も子供も自分もいつ死ぬのかわからない運命だと悟り、自分のルーツである貴重なアイヌの民話を伝えておきたいと思っている。

問七 この文章の構成の特徴を説明したものととして、最も適当なものを選びなさい。

ア 最初は、謎の子守り歌として「鳥の話」から本文が始まり、その後、「私」が青森やアイヌの民話を調べたことで、「私」の母や祖母がなぜ「鳥の話」を子供たちに話したのが最後になってわかる構成になっている。

イ 何の断りもなく、いきなり「おまえのお父さんはまだ帰らない」という「鳥の話」から本文が始まることで、読者もまた父親の死に直面して、登場人物の「私と弟」と同じレベルで恐怖を感じる構成になっている。

ウ 最終的に「私」は、民話や歌を調べたことで「鳥の話」の由来を知っているのだが、幼い頃に母から聞いた謎の子守り歌の思い出から語り始めることで話の衝撃的な内容が読者の印象に強く残る構成になっている。

エ 「母」が「お父さん」が殺されて「首なし鳥」になる話を子守り歌として語っていたことから本文をはじめ、のちに実の父が浮気をして去ったことを語ることで深い恨みが込められているとわかる構成になっている。

問八 この小説の作者・津島佑子の父親は、青森県北津軽郡金木^{かなぎ}出身で、たびたび自殺・心中未遂を起こしたり、薬物中毒になったりという乱脈な生活をしたことから、戦後「無頼派」と呼ばれた日本文学史を代表する著名な作家であり、④は彼の代表作の冒頭部分である。以下の問題に答えなさい。

④ 朝、食堂で、スープを一さじ、すつと吸ってお母さまが、

「あ。」

と幽^{かす}かな叫び声をお挙げになった。

「髪の毛？」

スープに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

「いいえ。」

お母さまは、何事も無かったように、またひらりと一さじ、スープをお口に流し込み、すまして顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スープを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。ヒラリ、という形容は、お母さまの場合、決して誇張では無い。婦人雑誌などに出ているお食事のいただき方などとは、てんでまるで、違っていらつしゃる。

(一) ④の作品を書いた作家の名前を選びなさい。

ア 夏目漱石	イ 谷崎潤一郎	ウ 川端康成	エ 芥川龍之介	オ 太宰治
カ 志賀直哉	キ 三島由紀夫	ク 村上春樹	ケ 大江健三郎	コ 中島敦

(二) ④の作品名を選びなさい。

ア 「坊っちゃん」	イ 「春琴抄 ^{はるきんしょう} 」	ウ 「伊豆の踊子」	エ 「蜘蛛の糸 ^{くも} 」	オ 「津軽」
カ 「暗夜行路」	キ 「金閣寺」	ク 「走れメロス」	ケ 「人間失格」	コ 「斜陽」

2023年度

渋谷教育学園幕張中学校 一次入学試験問題において、
以下のような誤りがあったことが判明いたしました。
お詫びして訂正いたします。

【 社会 】

問題冊子2ページ・5行目

(誤) 新型コロナウイルス感染症の…

(正) 新型コロナウイルス感染症の…

【 国語 】

問題冊子1ページ・8行目

(誤) ほとんどない

(正) ほとんどない